

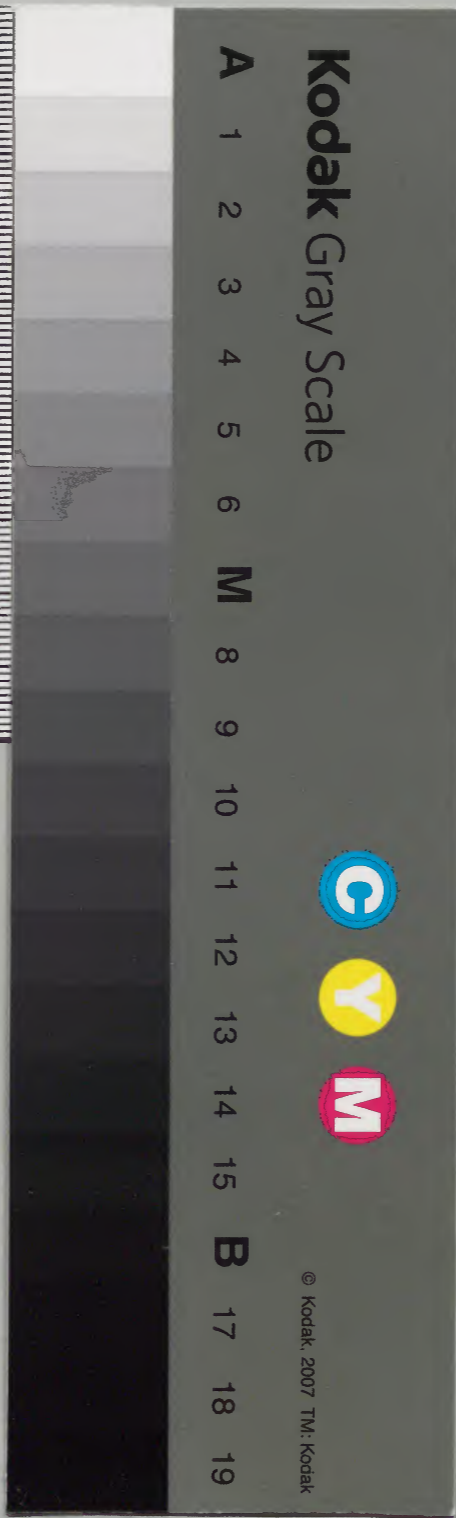
武家名目抄

職名部世上下四十七四十八

			一六	和
			二四	書
			二五	門
二七	四〇			類
冊	架	函	號	

庫	文	閣	内	
一五		一五		和
三函		四二		書
一七		二五		類
架	冊	號		

内閣文庫	
番號	和 16425
冊數	27 (21)
函號	153 277



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

温故堂文庫

職名部廿二上

九州概題

帝王編年記九州概題前上卷

身門國學因書月為其統在代下前編五

身門國學因書九月八日身門練頭

身門練頭

九州概題

身門

身門

九州探題

鎮 大イ 稱鎮西守護

鎮西評定衆

鎮西引付衆

鎮西警固番

長門探題 又稱中國探題

長門國警固番



武家名目抄第卅七冊

四十七冊

職名部廿五上

淺草文庫

九州探題

帝王編年記云九州探題前上總介實政建

後守實 特三四月

治元年十一月為異賊征伐下向鎮西 十七歲



弘安六年九月八日任上總介同十月遷長

門國警固 按當時の九州探題の名ありしは、
ありし吳烟征伐の長友と下向せし也
其の後乃探題の職よりありしを
本書に記すは、其下の地也

尊卑分脈云北條時定遠江正應二於筑前
 國卒按時定卒一と好永仁元年兼時補
守一と其の同ハは職あり一と見えたり
 帝王編年記云九州探題越後守兼時永仁
 元年三月七日下向同三年四月參關東
 北條系圖云宗頼男兼時越後行鎮西永仁
 三年九月八日卒卅二歳按兼時其父宗頼を
其城防禦の爲小長
 門に籠りて其の末子もあきり其のあり兼時
其其賊警固此爲小弘安六年五月三日播州より向
同七年十二月三日入洛一と一と波羅守護とあり其に
至く其子鑑高より下向也一と北條記に見えたり

尊卑分脈云北條時定遠江正應二於筑前
 國卒按時定卒一と好永仁元年兼時補
守一と其の同ハは職あり一と見えたり
 帝王編年記云九州探題越後守兼時永仁
 元年三月七日下向同三年四月參關東
 北條系圖云宗頼男兼時越後行鎮西永仁
 三年九月八日卒卅二歳按兼時其父宗頼を
其城防禦の爲小長
 門に籠りて其の末子もあきり其のあり兼時
其其賊警固此爲小弘安六年五月三日播州より向
同七年十二月三日入洛一と一と波羅守護とあり其に
至く其子鑑高より下向也一と北條記に見えたり

帝王編年記云九州探題兵庫頭時家尾張守公

時永仁元年七月廿四日下向同三年四月

參關東月八日年廿二歲

此類圖之宗跡與時家
永仁元年三月廿七日可同同三年四月為關東
永仁元年三月廿七日可同同三年四月為關東
永仁元年三月廿七日可同同三年四月為關東
永仁元年三月廿七日可同同三年四月為關東

島津文書云為異賊警固所下遺兼時時家

於銘西也防戰事加詳定一味同心可運籌

策且合戰之進退宜隨兼時之計次地頭御

家人安寺社領本所一圓地輩事背守護人

之催促不一揆者可記申殊可有之沙汰之

由可相觸薩摩國中_{永仁元}之狀依作執達如伴正

應六年三月廿一日島津下野之原左衛門

尉殿法真守左判相換守左判

太平記云 武家繁 承久三年ニ始テ洛中ニ

兩人ノ一族ヲ居テ兩六波羅ト號メ西國

ノ沙汰ヲトリ行セ京都ノ警衛ニ備ラル

又永仁元年ヨリ鎮西ニ一人ノ探題ヲ

下シ九州ノ成敗ヲ司シメ異賊襲来ノ守

ヲ堅ス 按永仁元年ヨリ當時時家二人ト向テ

一人ト記スリ當時軍勢と為ラセ

北條系圖云時定子定宗修理永仁三年八

月十九日於鎮西卒 按判明定宗ハ是年當時時家

帝王編年記云九州探題前上總介實政永

仁四年亦遷鎮西四十御家人等沙汰止注

進可成敗之由被仰畢正安三年九月日出

家上總介政顯實政正安三年十一月二日

鎮西奉行三十三○按北條系圖ニ政顯任鎮西探

頭とありけり

の探題とありけり

書可致之沙汰且案所被写下也一讓所領
妻女事任式目可有之沙汰事一七十以後
讓事不可有其難矣一肥後國白間野道山
次郎惟房與野依越前房忠信相論賄賂事
任式目可令成敗矣一肥前國云島内盡為
前位食令謀書事有所職者者可被改替其
所職者可被罪科之由可申入公家之有相
觸之波羅矣一搆不實致監罰輩事右松儀

眾若不極之處近年致監惡之輩動企謀計
為世人不可誠然則辨訟之類甚奸曲者之
被沒收不領無所帶者可處流刑至郎從以
下者可呂禁其身但隨事之辨可有輕重款
正安二七七

又云一牒使來者着時在所弄問答法事任
先例可令斟酌矣異賊防禁案以以大藏五
郎入道惠廣依田五郎左衛門尉以威所仰

遺也若依你執達如件正安二年七月十日
上總前司殿陸奥守判相換守判
又云系一可被崇敬佛神奉九州為宗寺
社破壞以下不遂檢見且可令陸奥檢見之
由不此治使者也但於遠不令使者檢見為
雖混者可計沙汰一次香推社造營事筑前
國怡土元為料不令造營之由被宣下奉紀
之處于今不遂其功云云未作之有限云

當社之不出可為陸進一次紀前國沙上社
奉如高木伯耆者亦定代申狀云當國怡土
米寄附之處或有人借用或願主米借
冒有名無實云云仍云借用云未進陸奥領
之急速不令遂之一城鄉奉次岩口奉奉府
構城鄉之系為九州將軍云云構云云早
為願主不令沙汰令政王構云云一寄役不
致自由合戰奉級陸奥按羣之忠不令沙汰云

州下向元亨三年七月按種時實ハ武苑也久時の子

[Faded handwritten text in a red-bordered box, likely bleed-through from the reverse side]

太平記云 筑紫合 京都鎌倉ハ已ニ高氏義
貞ノ武功ニ依テ静謐シ又今ハ筑紫へ討
手ヲ被下テ九國ノ探題英時ヲ可被責ト

テ二條大納言師基卿ヲ太宰帥ニ被成テ
既ニ下シ奉ラントセラレケル
又云 長門探題 長門ノ探題遠江守時直鳴
渡ヨリ舟ヲ漕モトシテ九州ノ探題ト一
所ニ成ント心ツクシヘソ赴キケル赤間
カ關ニ著テ九州ノ様ヲ伺ヒ聞玉ヘハ筑
紫ノ探題英時モ昨日早小貳大伴カ為ニ
被亡テ九國ニ島悉公家ノタスケト成ヌ

ト云ケレハ云々

龍造寺記云元弘年中家親官軍ニ属ス一

族龍造寺左衛門次郎入道善智鑰屈行心

坊増秀等探題平英時ヲ誅伐ス

太平記云公家武家榮枯易地條前代相摸守ノ天下

シ成敗セシ時諸國ノ守護大犯三个條ノ

檢断ノ外綺フ事無リシニ今ハ大小ノ事

共ニ只守護ノ計トニテ一國ノ成敗雅意

ニ任スレハ地頭御家人ヲ郎從ノ如クニ

召仕ト寺社本所ノ所領ヲ兵糧料所トテ

押ヘテ管領ス其權威只古ノ六波羅九州

ノ探題ノ如シ按上廿二條ハ鎌倉
將軍家の探題あり

武田系畷云信宗男信武孫六陸奥守伊豆

守從四位下九州探題康永年中天龍寺供

養隨兵按信武九州探題の事太平記その他當時の書
以て足るされも疑しければ一色氏敵仁
木義長等れあは西國の政務をありりりんをたり
か、けれども是は、幸也れま、我友に、

Handwritten text in a red-bordered box, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is written in vertical columns and is mostly illegible due to fading and bleed-through.

Handwritten characters at the top of the page, possibly a page number or a section header.

阿蘇大宮司惟澄申狀云延元二年四月十
九日一色少輔入道下國之時武重相共馳
向犬塚原致散合戰一色入道舍弟右馬
助入道其外攝薩摩弥八國分十郎以下於
當手討取畢中略延元三年十月賴尚率數千
騎攻來甲佐城之時惟澄僅以卅餘騎懸出
城外或討死或被疵畢次押寄郡浦討取一

色少輔入道代田井間三郎其後又攻落南

郷城仁木右馬助義長代立田七郎甥立田

十郎生取之其外數十人討取畢按是より先
言及水軍

西國へ没落の此一色入道敵仁木義長より功ありと
以て二人を以て西國の軍政を司す

探題の任り
ありし也

祇園執事日記云觀應元年十月十七日鎮

西兵衛依敵冬被卷義兵仍小貳大友与力

より由飛脚より到来より就之来亦五日將

軍可有法發向より中有其沙汰徳西探題一

色入道筑于肥前國草野城より

菊池武朝申状云興國以後者武光奉成故

大王入御最初於八代城自令對治一色入

道道敵父子之後申沙汰大小籌策令服大

友少貳等於御方廿餘年之陣鎮西一統之

大功者也

太平記云崇徳
院條今年延文三春筑紫ノ探題ニテ

將軍ヨリ被置夕リケル一色左京大夫直
氏舎弟修理大夫範光ハ菊池肥前守武光
ニ打負テ京都へ被上ケレハ小貳大友島
津松浦阿蘇草野ニ至ルマテ皆宮方ニ順
ヒ靡キ云々 按在氏範光ハ
全事小建武事あり
源頼朝の男あり
又云 九州探題 筑紫ニハ小貳大友以下ノ
將軍方ノ勢トモ菊池ニ追スヘラレテ已
ニ又九州宮方ノ一統ニ成ヌト見ヘケレ

ハ探題ヲ下メ小貳大友ニカヲ合セテハ
叶マシトテ尾張大夫入道ノ子息左京大
夫氏經ヲ九州ノ探題ニ成テソ被下ケル
今川記云了俊ハ肥後氏西早世の後心省の清光
継々々々京都不祗候有ク宝室蓮院殿肥肥
進一康安貞治の以傳不マテ皇皇マ一也康
苑院殿乃由時西玉の由歌の増起セうえ九只
の擧頭より後と云作身一ト云己ふ發向の事

在江國の守護職と惜く思召さるる也後以細
川殿へ岩栖 わくし かくよきくはるはれたり何ふく
心ふきく思召は浪名の橋れ秋乃夕暮と有
くはは清ふ玉ゆきく あき 遠之可くよの
は あき 本もきくやき

阿蘇宮文書云鎮西大將事不可依此御遊
去可有嚴密之沙汰候其間有堪忍可被待
付彼下著候不可有等閑之儀候恐々謹言

十二月八日謹上阿蘇大宮司殿右馬頭頼

之 按これより自治六年義治將軍薨きし是の時
物多しは西大將軍と今川貞世の事と云ふ
亦同

又云鎮西大將軍先立被仰訖既治定候間
發向可為近日也且累年忠功異他條候条尤
所令感悦也相構令堪忍可被相待彼下著
之状依仰執達如件應安元年十月廿八日
阿蘇大宮司殿武藏守判

花營三代記云應安三年十月二日今川豫
州禪門為鎮西下向自遠州歸路洛云々十一
月廿六日太宰少貳冬資下向鎮西云々十
二月十六日同伊豫入道下向云々
又云永和元年九月十四日去八月廿六日
午刻於肥後國軍陣太宰宰少貳冬資為探題
今川伊与入道被謀誅之由使者到來
大内義弘退治記云九州一統トシテ御敵

數萬騎中國ニ打越ヘキ企アリ仍今川伊
豫入道カ為探題雖被差遣其勢僅ニ三百
餘騎微力ニシテ不能令渡海九州然間致
合力可發向九州之由蒙上命某十六歳ニ
シテ率四千餘騎探題相共渡海九州二十
年ノ間此彼コニ宗徒ノ合戦トモ二十
八箇度滅敵敵致無二忠節所世知也
今川了俊書札後云公方の口沙汰トモモ或

き随官法或は年老次ありきと定むるを
是^中略此同是きく又向き書札の礼小述と
忠懐とありきしは之勿辨む者ハむし今ハ
まていしる賢辞返り度ハ一^{我等}仁樂^{我等}事^{我等}既
九州の復順時ハ別將軍家ハ身と被^{我等}位
ふ^{我等}居^{我等}ら^{我等}る^{我等}式辨ハ^{我等}方^{我等}ニ^{我等}向^{我等}し^{我等}て^{我等}の^{我等}以^{我等}札^{我等}と^{我等}を
し^{我等}り^{我等}る^{我等}辭^{我等}返^{我等}り^{我等}あ^{我等}ら^{我等}今^{我等}と^{我等}辨^{我等}く^{我等}南^{我等}表^{我等}と^{我等}表^{我等}し^{我等}
は^{我等}考^{我等}自^{我等}化^{我等}寫^{我等}畢^{我等}し^{我等}後^{我等}と^{我等}く^{我等}ら^{我等}る^{我等}お^{我等}互^{我等}に^{我等}あ^{我等}り^{我等}謹^{我等}と

たふへくは今も京都までも大方の一方に引舟乃
以人^{我等}之^{我等}事^{我等}始^{我等}と^{我等}き^{我等}り^{我等}れ^{我等}止^{我等}庇^{我等}達^{我等}ま^{我等}り^{我等}詳
定^{我等}庇^{我等}事^{我等}以^{我等}人^{我等}寫^{我等}畢^{我等}し^{我等}後^{我等}と^{我等}く^{我等}ら^{我等}る^{我等}お^{我等}互^{我等}に^{我等}あ^{我等}り^{我等}謹^{我等}と
以人九州探頭と^{我等}る^{我等}禮^{我等}乃^{我等}以^{我等}札^{我等}と^{我等}る^{我等}者^{我等}子^{我等}細^{我等}に^{我等}
難太平記云世人乃中あ^{我等}ら^{我等}る^{我等}後九州と^{我等}る^{我等}あ^{我等}ら^{我等}る^{我等}
事ハ人二人のた^{我等}ら^{我等}る^{我等}處^{我等}と^{我等}る^{我等}大内入道探頭
の大^{我等}望^{我等}を^{我等}と^{我等}る^{我等}又ハ洛川と^{我等}る^{我等}探頭た^{我等}ら^{我等}る^{我等}勅
解由ハ^{我等}方^{我等}便^{我等}と^{我等}る^{我等}
按島解由ハ^{我等}方^{我等}便^{我等}と^{我等}る^{我等}
斯波義相なり

大友系圖云親世修理大夫探題未補之間
親世宜致九州之成敗之由有鹿苑院義滿
將軍之御判竭忠於將軍家野戰攻城其威
振于九國按九ハ了後退職の後沿川
流に未補のる乃十年なり
澁川系圖云滿頼右兵衛佐左近大夫將監
九州探題兩度應永三年下向同三十二年
上洛應永十三歲八月三日落髮滿頼男子義
俊左近大夫將監應永廿五年探題職同三

十二年没落言其跡云後世日蒙古高麗
神明鏡云應永廿六年七月十五日九州探
題澁河左京大夫滿範注進狀云蒙古高麗
引合兵船五百餘艘對馬國ニ押寄彼島ヲ
打取之處探題并小貳以下兵共押寄及散
散合戰之刻天地震動大風吹雷鳴神變種
種中ニ女人御方ノ船ヨリ出多ノ敵船ヲ
覆ス剩蒙古大將ノ弟ヲ虜ス卜小貳注進

居併神明の威力ニ仍也上様の御運も殊
日出畏入候委細猶略して注進状如件七
月十五日探題持範判

澁川系圖云滿頼弟滿行滿行子滿直男中務

大輔武藏守正長元年探題職永享六年正

月廿日於肥前神寄為少貳討死滿直子教男

直右衛門佐永享六年十月十六日年十三

探題職御教書下文明十一年於綾部卒教

直子男萬壽九文明十一年六月一日家相續

長享元年十二月於岩門龜尾城郎等足助

森戸齋藤宮之萬壽九弟尹繁右兵衛佐探

題明應九年八月十二日任之按教直傳凡永享以下書下り

以中十九字と脱せり
今矣切又より補ふ

蜷川親元記云文明十年九月三日辛酉大

内殿状六月八日附到東九州探題澁川右衛門

依殿教喜直喜冬大月下國之時序書也請文

二月十八日附被掩護之十五年五月廿五日戊

午方門及より去殿へ右刀令武千尺被進

九州探類合方沙中知事あり中沙沙法

以礼也對少貳合戰儀也

法川家譜云鎮西探類職事所補任也餘仁

先例可致沙法之状如件明應九年八月十

二日法川右多流傳殿判義甲將軍

又云義滿將軍之御代法河滿類二九州探

題職初而被仰身應永三年二筑前國二孫

下滿類より尹繁と五代ハ九州之致押天

文二年二筑紫殿謀叛二ヨリ致合戦一門

大略討死仕候其砌森戸板倉右武人之家

老共某親竟顯ヲ相技ケ筑前ヲ逐出者馬

殿ヲ頼申肥前國藤津郡二致宰人其後天

正之年就造寺隆信之代二孫生子二符中

于今存命孫在事按是取平繁の男なり

大館常興記云天文十年十一月七日依方より

承九洲之人たぬ川度今之石西礼事宗貞基と

水方刀馬青洞ニ大進出々次御字義事官

途左之事右之一々次肥前國人々歌同之

以下知事次法寺也世本條々伊勢守方へ

中州也八月十五何歳大内左京兆より副状

八月廿日日付也有々仍各々下乃水字并官途事

何七各利義存々歌同之敵以下知事ハ以流状

有之可有言之次法寺也世本是又以流状可

有書上之由可々作下也々由者存分也也

九日日知事州より者へ以新紙書々如此也九

州流川度以月書并水方字一々下水居候左

京方丈度以局文仁如此々作書各存分可有

以中一々水方字書々以水内書々事何歳一

途事一可有書一々忘々謹之十一月廿九日法

内流川度中日知事言々判九洲流川殿法

大友氏之傳々傳々其のあまことと温門氏没落の後彼
あまことハ探頭ありて其のあまことありてあまこと
あまことハ探頭ありて其のあまことありてあまこと
あまことハ探頭ありて其のあまことありてあまこと

大友記云 大友給九州能直ヨリ九代ノ後

胤修理權大夫源親世ヨリ以來九州ノ探

題ニ備リ夕マフ彼親世ト申奉ルハナラ

ヒナキ仁義ノ名將ニテハシケル御世

ツキ夕マヒ肥後國菊池ト對陣夏七十一

度也中略 菊池ウタレシカハ豊筑肥六ヶ國

事故ナク御手ニ入九國ニ島親世御旗下

ニソナリニケル世ニツマリ官位ノタメ

上洛マシニ奏聞シ夕マヒケレハ御門

叡覽アリテ九州ノ探題タル院宣ヲナシ

下サレ其ヨリ以來筑紫ノ探題ニ備リ給

ヒケリ 按南文のゆゑに大友の矯飾を信受せし

探頭とありて其のあまことありて其のあまこと

あまことハ探頭ありて其のあまことありてあまこと

又云 義鎮公 其後事故ナク 義鎮公大友十

八代目ノ探題トアツカレタマフ若クマ

シマセトモ御仕置宜クシテ豊筑肥六介

國ノ上下萬民トモニ此君ヲ渴仰スル事

不斜

又云 石松源五郎立 其比天下ニハ前ノ羽

柴 筑前守秀吉關白職ヲタマハリ四海治

ント威ヲフルマヒ給フ是ニヨツテ宗麟

公御上洛ナサレ秀吉公ニ御目見ナサレ

抑大友ハ代々九州ノ探題職ニテ候ニ此

八九年カ間龍造寺秋月等ツレカシテ背

キ已カホシトマニ所領ヲ妨ケ候云々

按九列探題ハ異賊防衛ナリテモ遠あり下向

國 終國々ノ法々あり志々あり後々ありてハ二島九

列乃機勢と云ふありてハ事々ありてハ事々

威名ヲ報原と考ふるに本紀了 永仁元年より

又鎮あり一人は探影を下し九州乃成敗を司と
らむと見え又帝王海軍記九州探影城海軍
為時永仁元年下向とある者時より此職城
重なりと見えたり
探影の文字釋家より出るるは
正なる三階探影の際ふれり
その後探影北條英時よりなり元弘の乱は官軍の爲
小亡きれ一好一色仁木等を以て其任を
中兼地武光と戦ひ敗れりふり又尾張系
大友氏強を九州の探影とあり下されおぼし

今川源と此職を司たりその後大友代に
探影と見えり
移り少くも職は実小源川を座を家あり龍造
秋月等大友の所城坊より
移り自も龍造あり

鎮西奉行 又稱鎮西守護

鎮西要略云文治元年八月參河守範賴
鎮西賴朝卿以土肥二郎實平令兼行鎮西
之事云

書正一の中書と名へり
按ふ所は侍所等の名あり
は九条の成敗として下向せり

吾妻鏡云文治元年九月廿一日辛丑參河
守範使者參着既出鎮西在途中今月相構
可入洛八月中可參洛之由雖蒙嚴命依風
波難遲留恐思云似十月廿日己巳御堂供
養導師本覺院僧正坊公顯下着所相具廿
口龍馬也參河守範賴朝臣相伴參着云々
彼朝臣今夜即參二品御所申日來事去月
廿七日自西海入洛

鎮西奉行 又稱鎮西守護

吾妻鏡云文治二年十二月十日癸未今日

藤原遠景為鎮西九國奉行人又給所々地
頭職等云々三年九月廿二日庚申所衆信
房号宇都宮所為御使下向鎮西是天野藤内遠
景相共可追討貴海島之旨依令嚴命也件
島者古來無飛船帆之者今度今度同意豫
州之輩隱居款之由依有御疑貽有此儀又

去年河邊平太通綱到件島之由聞食之間
殊所思云々給云々遠景元來在鎮西云々十
一月五日壬寅鎮西守護人天野藤内遠景
申云浴思澤當所住人等莫任御下文旨去
八月十八日加施行畢云々四年二月廿一
日丁亥天野藤内遠景去月狀昨日自鎮西
參著去年窮冬令郎從等渡貴賀島井窺形勢
訖令追捕之條定不可有子細但雖相催鎮

西御家人等不一揆之間頗以無勢重可被
下御教書云々五月十七日壬子遠景已下
御使等渡貴賀島井遂合戰彼所々已歿降之
由所言上也而宇都宮所衆信房殊施勲功
云々
又云建久二年正月十五日甲子被行政所
吉書始略中鎮西奉行人内舍人藤原朝臣遠

景號天野藤内
左兵衛尉

古今著聞集武勇録右大将高藤國と責し時乃逃

討使日あま此の式部大史を景向きり大將家の

きり物々々西國九西を知りしるきり威平し

いふる一高藤國をち一あく上洛の時渡部

少中番の妹とてしるきり按しよる言

ふと師ま賀井高藤國といふ

武藤系圖云資頼筑後守法名覺佛建久二

年二被充賜太宰府守護岩門少卿種直跡

三千七百町并領了嘉祿元年二守佐八幡

宮ノ依遷宮任太宰少貳始ハ武藤小次郎

ト号畢

尊卑分脈云武藤資頼少卿筑前守鎮西守

護法名覺佛

百練抄云安貞元年七月廿一日於關白直

廬有議定事左大臣已下參入去年對馬國

惡徒等向高麗國全企羅州奪取人物侵凌住

民事可報由緒之由牒送太宰少貳資賴不
經上奏於高麗國使前捕惡徒九十人斬首
偷送返牒云々我朝之耻也牒狀無禮云々
吾妻鏡又云貞永元年八月十三日筑後前司資賴
入道法名是佛 辭鎮西奉行事彼狀去比到著今
日有其沙汰以石見左衛門尉資能被補其
替云々按資能ハ資
賴ノ男なり
大友系圖云能直豐前守建久四年賜豐前

豐後兩守護同七年六月十一日豐後下向

貞應二年鎮西奉行卜成十二月二十七日

於大野郡藤比死去折能直能多行と云うて資
賴と同時に汝能直能多行と云うて

吾妻鏡に記さるる疑ふに所はれども、その條に
遂に終る多行と云うて、汝能直能多行と云うて、
さうしてこれと能直能多行と云うて、九代改勢以て
弟人比と云うて、難うと云うて家流表の中に記さるる
又云能直子男親秀大炊介彌出雲路鎮西奉

行親秀子男賴春初名泰忠北條時賴賜一字

姓改平氏兵庫頭出羽丹後等守鎮西奉行

尊卑分脈云大友能直使豐前守鎮西奉行
能直^{子男}親秀大炊助鎮西奉行親秀^{子男}賴泰
兵庫頭出羽丹後守鎮西奉行
吾妻鏡云寬元二年二月十六日丁亥今日
有評定條、被定其法一西國守護奉行事
於鎮西者任大將家例可致沙汰必不可依
式目其外西國者任被定置旨可致沙汰之
由可被仰遣六波羅

東寺文書云明年三月丁未被征伐異國也
梶取水主等能為其令不足者丁未元山法
山湯南海通之由被作太宰少貳經費了作
安藝國海邊知行之地頭許家人本所一系
地等兼日信德梶取水主等經費令相觸者
守被配分負教早達了令送遣情多也者
依作執通如件建治元年十二月八日武田

後下知或雖經知所為部質券

地之成系多矣誠志可沙法有之云々 按盛宗
名初ハ

秋田城次郎と稱し蒙古襲來の事ニ依りて西ノ
下向一紀後必乃多獲とありて警洵とて多ク人オ也

尊卑分脈云藤原泰盛秋田城介陸奥守弘

安八年十一十七被誅泰盛子盛宗越前守

於鎮西同時被誅

新編式目追加云六波羅英治西守護人注

進狀事辨人雖不参向隨到來早速可申沙

汰 立止奉給西奉令云云奉給保備之類也

又云鎮西神領英名至等所領事 弘安如日
九

來多相遠者可領縱雖有御使下知先如元

可令沙法有但非公押領英新儀監妨事者

各寄合尋明可令注進之由可被仰少貳入

道兵庫入道薩摩入道河内掎守入道等 按
二

貳入及之經實兵庫入及大友頼泰河内掎守ハ混答ニ
以多之薩摩入及之考法多クハ右ノ日向の伊東
氏あり

包一

又云鎮西輩稱弘事

弘安九年七月十六

守護人可令尋

沙汰之由先日被仰年雖無於地頭御家人

等社別高神至供僧祓官訓名至庄官以

下企參許云々於自今已後者非別仰之文關

大友系圖云賴泰男親時

或親言

因幡守鎮西

奉行親時男貞親出羽守鎮西奉行弘安四

年蒙古人藝末時司軍令抽戰功貞親弟貞

宗近江守鎮西奉行元弘建武兵亂之時從

尊氏將軍勵武功余末子孫相傳於九州以

當家為隨一

志賀文書云當年表地子事去年十一月十

月八日大宰守武法進狀念三積聚
九月以神妙弘事勵志并之

八之録西軍海軍...
沙路之由先...
社別山神...
六支不圖...
赤野...
常是...
東山...
...

七日關東法教書每今年三月廿九日陰西

法施以素文如此早紀被仰下旨不可被寤宛

課士民惟仍執達如件元亨二年四月一日

三奈友志賀次序及太宰少貳花押按乃少貳之貞經

の事あり経賢の孫
盛經のまをり

阿蘇宮文書云肥後國凶徒退治事如去正

月八日太宰少貳注進状念重猶致軍忠云

云尤以神妙弥可勵忠節之状如件貞和三

年三月九日阿蘇前大宮司殿判尊氏○按

貞經の子類あり

野上文書云屬左衛門少貳直資手致忠良

条尤神妙也任可抽戦功之出如件親魚二

年七月十八日野上次郎之郎及花押○按

直資男と類高の子あり

按鎮西奉行は遠西九國の成敗を自ら取りかて守備しし様あり

鎌倉殿に代り命せし事身抱是利家を奉りては左衛門少貳

を頼りて別り其職とわかれさしは右左衛門少貳

按鎮西奉行は左衛門少貳の成敗を司りて奉り

ゆりて後を復しし様ありは職は鎌倉殿の

以命をとりては左衛門少貳の成敗を司りて奉り

事代は左衛門少貳なりは左衛門少貳の成敗を司りて奉り

は左衛門少貳の成敗を司りて奉り

は左衛門少貳の成敗を司りて奉り

又源仁の一人の孫は鎌倉殿に代りて奉り

利家の時なりとも一は左衛門少貳の成敗を司りて奉り

行方より九曲の成程をすして様敷の訴り
こゝちねのりて改に法度申すの職を
けまねぬこゝちねのりて改に法度申すの職を
さく事と御後にもまらざる所へ
のりて改に法度申すの職を
さく事と御後にもまらざる所へ
さく事と御後にもまらざる所へ

鎮西評定衆

鎮西引付衆

大友系圖云貞直太郎左衛門尉元弘三年

四月四日逝去鎌倉殿御教書云越後九郎

武藤盛氏 豊前前司澁谷河内權守重郷伊勢民部大

夫戸次太郎左衛門尉可為鎮西評定衆者

依仰執達如件永仁七年正月廿七日相摸

守貞時判

新式目云條々一召文事止同狀法使催促
共可為之今度事一召文事停止國難色可
被仰當國守護並近隣地頭津家人等事一
於引舟可有法下知取捨事一評定事書取
舟每繼目封事當日可令申沙汰事一急事
外於引舟座不可書法教書以下事一自評
定之勅返沙汰事不日加評議後日覆勅申
事一取人並用園仁退座沙汰事可渡他方

引舟事一諸人代官除返座外限可令停止
事一對同時一方人數兩三外堅可禁制事
一京下并無足評人及經年席沙汰事急速
可申沙汰事一清書仁令書上法下知者取
人封裏直可下評人事案之法事所被書出
事早守此者可被成敗之狀依仰執達如件
正安二年七月五日上總前司殿陸奥守判
相換守判

鎮西警固番

島津文書云蒙古人可襲來之由有其関
間所下遣津家人等於遠西也早速所下
用代官於薩摩國阿多小方相伴守護人且
令致^之英國防禦且可遠領内之惡黨者依
仰執達如件文永八年九月十三日阿多北
方地頭殿相換守^在判^在左京權大夫^在判^在

野上文書云肥前筑前兩國要害警固事每
豊後國中惡黨沙汰事今年三月十五日守
護所清書下如付子細被載狀公早且守狀
且無^二左右不可^下弃件要害汲^二不給^一公仍為^二
沙汰景泰令^下向^一公也為^二謹云^一文永九年
卯^卯九月十日野上^{資直}右^{資直}殿^{資直}及^{資直}京^{資直}景^{資直}泰^{資直}花^{資直}
北條記云建治元年四月十五日大元使著
長門國室津浦八月件牒使五人被召下關

東九月七日於龍口刎首其後警固事有沙
汰鎮西撰補守護人器用發遣海邊國止
京都大番役云々皆是為軍旅用意也

志賀文書之大友殿以下知案蒙古人用心

當就^志名志賀大郎可被勸仕由事可存^志

者仍執達如件^{文永十二}建治元年五月十二日前

出羽守

島津文書云箱崎段所築地事滿家院内此

志鴻西候河内前田以上四ヶ名分伍丈

尺肆寸被勸仕了仍之状如件建治三年正

月廿七日此志鴻古郎後方時按方時八志
時氏方人

鎮西要略云弘安三年九月十二日少貳經

資在判牒曰異國警固石築地袖濱内貳丈

五尺被築終之條承畢又曰異國警固博多

番役事自八月廿七日至九月十二日被勤

仕畢六年五月十一日肥前國住人岸川次

郎兵衛平野左近入道定樂三郎左衛門入
道多久弥太郎島田三郎笠寺三郎入道等
依有肥前執行於保四郎種宗之下知不相
勤博多警固石垣築地以下之役今日於奉
行所這列糺明之及嚴重沙汰云々
野上文書云條々一賊船奉雖令退散但自
由石可有上洛意仍若有殊急用者申子細
可被隨左右美一異國降人等奉若令預並給

分沙汰未斷之間津泊往來亦不謂晝夜不
論大小每度加檢見如然之輩輒浮海上不
可出國云海人漢和云陸地分內可有其用
意矣一從他國始來入異國人等事可加制
止矣一要害修固英番役事如日來無懈急
可被勸結矣條々及後急々細志定後悔云
款仍執達如件弘安四年九月十六日野上

右序殿右近如監押

島津文書云箱崎警固番及奉自今年正月
一日至四月晦日以代官多勤仕惟早仍執
達如伴弘安八年五月一日湯家院比志傳
入乃殿志宗判在
又云異賊防禦事該西地以涉家人并本所
一圓地輩從守護之俚且令加警固用意且
族可抽防我志功出素款如然之由先度被仰下早而被定
該西奉行人等之間若不從守護之命之族

出素款如然之輩假雖該合戰不可有其賞
可被處不忠也早存此旨可令相觸薩摩國
中之狀依仰執達如伴弘安九年十二月廿
日為津之席左衛門尉殿陸奧守判在相換守
判在
龍造寺記云弘安年中二蒙古襲來不竟造
寺季時壹岐島瀬戸瀬二於テ合戰有功家
益季友相共二勤博多警固番按家益季友ハ季時の弟也

鎮西要略云永仁二年探題兼時令九州諸
士代番勉博多警衛蓋是異賊鎮全武備故
也
新式目云奈々法事所被書遣也早守法可
被成敗之状依仰執達如件正安二七五上
總前司殿陸奥守判相換守判條々一城墾
車岩門并宰府構城墾之條為九州官軍可
得共構云々早為領主所之沙汰可致其構

云々一寄役所致自由合戰縱雖援群之忠
不可被行其責所給隨大將命可令進退由
嚴密可被相觸九州守護并御家人以下輩
也一兵糧米事先々下行無其虛款殊加談
儀可令注進一警固結書事為法人頗劣基
之由有其圖仍同前一兵形事海上合戰更
不可有其利款同前一大隅日向支國役所
今津段濱事先度雖除之為要海云々如元

警固

志賀文書之讓與相傳所領豊後國大野庄
志賀村南方在家田畠等并勲功賞事中略右
件所領等共所讓与末子賀安鶴九也於次
弟澄文等考依為類驗所副渡嫡子貞朝也
公家關東清公事番級以下合戰事可身摠
領之手不可有別旗蒙勲功之時考當配分
可令知所不可背嫡子令神畧仍讓狀如

件正安三年十二月廿日沙弥阿法在判

又云山内至わとせんくま丸とところ婦人これ
くふふとるりかうけらにいとんあむ大く飯
此む舟く不事や一ゆつとあ
多ふふとる也公事い事ハたく者

いこれ事嫡家大友ま大こ大昂きとむのう免ハ二
高くひくきん一ときとやと如件延慶三

年六月五日貞親花押

正安三年十一月廿一日

鎮西要略云應永十九年十一月探題道鎮
上洛筑前肥前近邦諸士勉博多留守番探
題之一族滿泰為留守

此處為淡墨書寫之文字，內容與右側正文相呼應，但字跡極其模糊，難以辨認。

此處為淡墨書寫之文字，內容與右側正文相呼應，但字跡極其模糊，難以辨認。

按文永小蒙古のうと(起)より九段二五八
とより西編縁法の法圖あり地以西家入る
京都の大妻段とともかゝるこゝ迄要の地と警
衛とふ事となりぬ(道)づゝゆる警國妻なり
中うも持多の法を探頭結末乃府ありに
箱峯二段石と接へ西列の法士結末一と申
む(の)こ(此)石の警と備とつゝもた(と)其地(前)
の今津又往新日向大隅等れ國も迄要(を)

津と泊(ふ)を(警)國の番(法)を(正)なり(時)際
氏亡(引)後(一)蒙古(取)既(滅)しく(親)密(の)思(た)る
可(く)し(は)も(也)是(利)取(り)を(九)分(探)頭(を)入(置)れ
た(と)も(と)あ(る)持(多)の(書)段(を)と(ま)し(は)る(が)り
と(し)も(探)頭(を)在(法)の(時)も(と)ハ(と)國(の)西(方)入
字(を)し(て)持(多)の(字)を(著)し(先)非(常)ふ
ゆ(へ)ら(れ)し(と)も(あ)り(し)らん(也)

長門探題 又稱中國探題

長門國守護職次第^第云相摸修理亮殿賴建

治二年正月十一日當國下著御代官太郎

殿賴
茂

一代要記云弘安二年六月十日鎮西守護

修理亮宗賴死去之由飛脚到來

長門國守護職次第云越後守殿兼^時弘安三

六五御代官長井出羽太郎其後岡田次郎

左衛門入道淨連

北條記云兼時弘安五年十一月五日任修

理亮同六年五月三日為異賊警固下向播

州同七年十二月二日入洛為六波羅守護

按多時弘安四年小長門探領善く師時を代ふ補せられたる事
以文小多時弘安賊警固下向下中道の子と云はれり

長門國守護職次第云武藏守殿^師御代官

駿河三郎殿弘安四閏七月晦日下國又代

官平内左衛門尉

又云萬壽殿^{武藏守殿御子息}御代官嵐野

五郎左衛門家盛弘安五八廿四著府
帝王編年記云上總介實政建治元年十一
月為異賊征代下向鎮西弘安六年九月八
日任上總介同十月遷長門國警固永仁四
年亦遷鎮西按實政公長門小左一官も徳政の子を授けしこと
利武自少為子文九物孫孫其而不引しり
長門國守護職次第云上總介殿真弘安七
正十七下國守護代平岡二郎左衛門尉為
時

又云左京權大夫殿時御代官左近大夫將

監永仁六八十一著府任近江守又尾張守

守護代吉良殿又小笠原入道連念下國

又云上野殿守護代橫溝小三郎清村按上野及

よき山條水也
の事なり

異本伯耆卷云四國ニハ河野一族土居ニ

郎得能弥三郎味方ニ成リ河野ヲ背テ旗

ヲ舉ケレハ河野ハ在京候間中國探題北

條時直小島ヨリ押渡リ合戦シ悉打負行
方ヲ不知落行ケレハ四國皆土居ニ付
太平記云 河野謀 慶二 後二月四日伊豫國ヨリ
早馬ヲ立テ土居二郎得能弥三郎宮方ニ
成テ旗ヲアケ土佐國へ打越處ニ去月十
二日長門ノ探題上野介時直當國へ推渡
リ星^岡ニシテ合戦ヲ致ス處ニ長門周防
ノ勢一戦ニ打負テ手負死人其數ヲ不知

剽時直父子行方ヲ不知云々御用心有へ
シトソ告夕リケル
又云 長門探題 降參條 長門ノ探題遠江守時直京
都ノ合戦難儀ノ由ヲ聞テ六波羅ニカラ
勅セント大船百餘艘ニ取乗テ海上ヲ上
リケルカ阿波ノ鳴渡ニテ京モ鎌倉モ早
皆源氏ノ為ニ被滅テ天下悉王化ニ順^又
ト聞エケレハ鳴渡ヨリ舟ヲ漕モトシテ

九州ノ探題ト一所ニ成ント心ツクシヘ
ソ赴キケル赤間カ關ニ著テ九州ノ様ヲ
伺ヒ聞玉ヘハ筑紫ノ探題英時モ早少進^貳
カ^{大伴}為ニ被^レ亡テ九國ニ島悉公家ノ夕スケ
ト成ヌト云ケレハ此マテ属順タル兵共
モ心替シテ落行ケル間時直五十餘人ニ
成テ柳浦ノ浪ニ漂泊ス彼浦ニ帆ヲ下サ
ントスレハ敵^ニ鏃ヲ支テ待懸夕リ且ク命

ヲ延ニ為ニ郎等ヲ一人舟ヨリアケテ少
貳島津カ許ヘ降人ニ可成由ヲソ傳ヘケ
ル^中不日ニ飛脚ヲ以テ此由ヲ奏聞アリ
ケレハ則勅免有テ懸命ノ地ヲソ安堵セ
ラレケル<sup>按こ上十三條ハ源倉敷
の時乃孫頭なり</sup>
園^三太曆云貞和五年四月十一日傳聞右兵
衛佐直冬今日進發向長門^國於彼國可成敗
八^八个國事之由風聞

長門國守護職次第云兵衛佐殿 直御代官

仁科左近大夫將監守護代柳田太郎左衛

門 按此代友といふ中丞諸州此代友なりといふ代友は
手後代ハ長門一守此代をいふなりといふ

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

太平記云直冬西國西國靜謐ノ為トテ將

下向條

軍ノ嫡男宮内大輔直冬ヲ備前國へ下サ
ル抑此直冬ト申ハ古へ將軍ノ忍テ一夜
通ヒ給タリシ越前ノ局ト申女房ノ腹ニ
出來タリシ人トテ始メハ武藏國東勝寺
ノ喝食ナリシヲ男ニ成テ京へ上セ奉シ
人也紀伊國ノ宮方共蜂起シテ事及難義
ケル時將軍始テ父子ノ號ヲ被許右兵衛

佐ニ補任シテ此直冬ヲ討手ノ大將ニソ
被差遣ケル紀州暫靜謐ノ體ニテ直冬飯
參セラレシヨリ後ハヤ人々是ヲ重シ奉
ル義出來レリ而ニ今左兵衛督ノ計ヒト
シテ西國ノ探題ニナシ玉ヒケレハ早晚シ
カ人皆飯腹シ奉リテ付隨フ者多カリケ
リ備後ノ鞆ニ座シ給テ中國ノ成敗ヲ司
トルニ有忠者ハ望サルニ恩賞ヲ給リ有

咎者ハ罰セサルニ其堺ヲ去ル云々

又云直冬鎮西斯ニ後ハ弥師直權威重ク

成テ三條殿方ノ人々ハ面ヲ低レ眉ヲ顰

ム中ニモ右兵衛佐直冬ハ中國ノ探題ニ

テ備後ノ鞆ニ御座ケルヲ師直近國ノ地

頭御家人ニ相觸テ討奉レト申遣シタリ

ケレハ同九月十三日杉原又四郎二百餘

騎ニテ押寄タリ云々右兵衛佐殿ハ河尻

肥後守幸俊カ船ニ乗テ肥後國へ被落

ケル

江濃記云二角系極明應永正其以畠山細川合

戦其法小ノ系極後以改元と一味ノ二角系極

畠山と一味ノ義平公方と此立出ルル

此時中興ノ探題大内氏系平人義興曰

此乃ノ公方也此傳ノ義平ノ人等と大内

十三年此乃存存不存ノ事

出門國々々々利を執此此と傳聞々々々々
吾々々々海人分々々々客居々々々々
冷水中腹々々々々々々々々々々々々々
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
如感石斜日録以紫下色と録々々々々
之白赤二千石黄合五石役料是八千貫々々
十分の六決子々々々々々々々々々々々
月お及所々々々々々々々々々々々々々々

後々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
新代々々々々々々々々々々々々々々々々々々
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
物々々々々々々々々々々々々々々々々々々
々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
指費々々々々々々々々々々々々々々々々々
例々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
の以様様々々々々々々々々々々々々々々

建治中、小幡宗親、沙由、下若の屋代友
と、海軍、主、一、ハ、中、あり、と、と、く、やく、田、地、を
く、所、分、給、る、を、さ、う、う、う、九、別、探、取、と、水、仁、中
く、主、わ、く、と、と、り、く、ハ、建、治、中、探、取、水、仁、比
沙、鐵、の、名、目、ハ、水、鐵、一、が、あり、一、建、武、一、流
堀、足、利、水、鐵、沙、由、あり、つ、う、う、一、好、く、沙、鐵
中、探、取、一、ハ、大、内、義、興、と、つ、及、い、と、其、他、の、水
く、と、と、水、鐵、一、と、う、う、一、ハ、探、取、の、録、り、を

長門國
大内とありく毛利を就彼に下取とあり
此人は名目すもあれども一も主候あり
らも然るれども一も一もあれハ候、探取と
し、ふ、し、大、内、と、混、り、う、う、一、主、候、と、名、目、は、こ
探、取、の、水、鐵、一、

大内義興
探取の録り

長門國警固番

東寺文書云長門國警固事涉家人不足

由信乃朝官入道行一令言上之間所被寄

周防安藝也異賊襲來時者早之今國相去

可令禦戰之狀依仰執達如件建治元年五

月十二日武田五郎次第相換守^{在判}武藏守

在判

又云長門國警固事無勢之由名國食之間

新_レ方_レ寄_レ周防安藝備後也且_レ以_レ國結蕃警
固要害_レ地且異賊襲來者相共可_レ令防戡
_レ狀依仰執達如件建治元年五月廿日武
田五郎二郎殿相換守_レ在判武藏守_レ在判
又_レ云異國用心奉_レ以山陽南海道勢可_レ令警
固長門國也於_レ地既補任_レ地志未_レ十月中
可_レ令_レ遣子息_レ由_レ依_レ下_レ早_レ備具安藝國
是_レ地頭_レ清原人_レ其在_レ一_レ國_レ之_レ地位人等可_レ令

警固長門國之狀依仰執達如件建治二年
八月廿日武田五郎次郎殿相換守_レ在判
武藏守_レ在判

按長門國警固蕃役ハ蒙古諸國より_レ來_レり
傳_レ入_レる_レ建治の初より中國あり_レ地_レ以_レ家
人_レ之_レ謀_レ去_レく_レ勤_レ役_レせ_レむ_レる_レ不_レなり_レ前_レより_レ也
_レと_レ長門國ハ古_レく_レより_レ船舶輻湊の要地を
_レる_レた_レる_レ是_レ城_レ寇_レの_レ患_レあり_レし_レより_レ始_レ頭_レと_レす

奥州總奉行

奥州探題 又稱奥州管領

羽州探題

陸奥出羽管領

蝦夷管領 又稱蝦夷代官

武家名目抄第卅四冊 四十八冊

職名部廿七下

奥州總奉行

吾妻鏡云文治五年九月廿二日己卯陸奥國御家人事葛西三郎清重可奉行參仕之輩者屬清重可啓子細之旨被仰下云々廿四日辛巳平泉郡内檢非違使所事可管領之旨葛西三郎清重賜御下文於郡内諸人

停止盪行可糾斷罪科之由云、凡清重今
廣勳功殊拔群之間匪奉此等重職刺伊澤
磐井牡鹿等郡已下并領數个所云、

又云建久元年三月十五日己巳左近將監

家景號伊澤可為陸奥國留守職之由被定位

彼國聞民庶之愁訴可申達之旨所被仰付

也四年七月廿四日戊子橫山權守時廣引

一匹異馬參營中將軍覽之有其足九前後

四 是出來于所領淡路國國分寺邊之由去

五月之比依有告乍怪召寄之旨言上仰左

近將監家景可被放遣陸奥國外濱

月廿九日庚戌... 入云是長二年十一月十八日...

云々五年六月廿五日甲寅獄囚數輩自京
都被召下其身可流遣奥州之由被仰左近
將監家景眼代之是強盜之類云々六年九
月廿九日庚戌故秀衡入道後家于今存生
殊可加憐愍之由被仰付葛西兵衛尉清重
伊澤左近將監等云々兩人者依為奥州惣
奉行也

又云建長二年十一月廿八日己丑放遊淳

傳止發行可也新成詳之由云々
廣南功殊按府之請正長建長
若非壯鹿年郡也下詳領數个所
又云建長九年三月五日乙酉
家司比伊可及是身因留于積之
進林盟身等亦林之輩等集與林
立民年秋則并書年對書等之
要此建長九年秋則并書年對書等之

養之士寄事於雙六好四一半博奕為事就
中陸奥常陸下総此三個國之間殊此態盛
也隨有風聞之說今日有驚御沙汰於自今
以後者圍碁之外至博奕者一向可停止之
由所仰出也陸奥國留守所兵衛尉常陸國
完^穴戶壹岐前司下総國千葉介等可加制禁
之由各合仰旨云々
按留守所多清尉ハ伊沢
氏少々家景の裔なり
又云康元元年六月二日辛酉奥大道夜討

強盜蜂起成往反旅人之煩仍可致警固之
旨今日被仰付于彼路次地頭等所謂壹岐
六郎左衛門尉^同七郎左衛門尉出羽四郎左
衛門尉陸奥留守兵衛尉宮城右衛門尉和
賀三郎兵衛尉同五郎左衛門尉<sup>自餘十七
人姓名畧</sup>
之已上廿四人御教書云奥大道夜討強盜
事近年為蜂起之由有其聞是偏地頭沙汰
人等無沙汰之所致也早所領内宿々居置

直人可警固只有如然之輩者不嫌自他領
不可見隱之由被召住人等起請文可被致
其沙汰若尚背御下知之旨令緩急者殊可
有御沙汰之状依仰執達如件建長八年六
月二日 按寺政司右左衛門尉同七郎左衛門尉八行北葛
西傳重乃後子多陸奥乃人なり
新篇式目追加云一近日出羽陸奥國夜討
強盜蜂起之間往還之輩有其煩之由風聞
尤不便是偏郡郷地頭等背先御下知無沙

沙之取致也甚無其謂早柴田郡内知行宿
宿宿直屋令結番殊可令警固也且籠置惡
黨之所不可見聞隱之旨可被召沙汰人
等起請文者依仰執達如件正嘉二年八月
廿日武藏守判相摸守判 按已上五條八條倉
將軍家のよりなり
花營三代記云應安五年二月十八日奥州
奉行事被仰松田左衛門尉訖 按此一條と足利
將軍家の時のより

名押先途に於奥州志大略帰依に凶徒方
大將石堂入道楯多打落に了於今志不可
有矣此に云く五月廿六日河曾大守司及
刑部大輔秀仲 按此状を康永元年の書なり
石堂義房の事なり
白河文書云結城大將少輔同彈正少弼式
部少輔伊達一族等奉参御方可致軍忠之
由先日被成涉教書訖可存其旨之状如件
康永二年四月十九日宮内少輔口原入道

殿御判 為成 ○按結城伊達
とよと奥州の好士なり

尊卑分脈云畠山高國上野介觀應二二十
二於奥州為貞家被討高國男國中務大
輔左馬權頭奥州管領与父同時被討國氏
男國 詮 修理大夫奥州探題國 詮 男滿泰修
理大夫奥州探題
又云吉良貞家修理大夫奥州一方管領貞
家男滿家中務大輔奥州一方管領 按一方管
領といふハ

高山國於今と國成
之とちく形ふ所の稱也

白河文書云奥州郡郡檢断奉行事任先例

不可有相違但於安積郡者追可有其沙汰

之状如件貞和二年六月廿七日結城大藏

大輔殿右馬權頭花押按右了持以之高山國

氏名分脈右了持以とある

又云陸奥國白河庄岩瀬郡小野保檢断事

京都御左右之程守先例可被奉行之状如

件貞和二年七月十六日結城大藏大輔殿右

京大夫花押按右京右史右
吉良貞家なり

陸奥國會津示現寺文書云三浦大炊小左

郎左衛門尉盛通妻平氏申陸奥國耶麻郡

内下利根川村高知仍分安堵事申状去通

謹進覽之子細載干状依以代官令言上候

可被經涉沙汰依以此旨可有涉披露依

謹云貞和四年八月十二日土武藏守殿右

光被裁許高^當知行^所之^所爰時光^所既^所令同意顯
信卿當時凶徒隨一也於高光者自家初為
御方去^之年^之致軍功至今抽戰功上者
當所等本領當知行無相違可預安堵沛下
文之有申之急速被經沛沙汰候哉高光軍
忠若偽申候者八幡大菩薩^善御罰可罷蒙候
以此有可有御披露候忍惶謹言觀應三年
卯月十三日進上遠江守殿右京大夫貞家

判^判又云陸奧國石川庄下河邊八幡宮者伊豫
大守八幡殿御時被奉崇敬社檀也然者今
度凶徒對治奉^請令祈^請精之處依為嚴重當國
會津河沼郡内依野村令奉^請寄之候就其可
預^請公方御寄進出之有神主石川掃部助高
光申之候急速可有申御沙汰候此^以此有可
有御披露候忍^謹言觀應三年七月八日

進上仁木兵部大輔殿右京大夫貞家判

白河文書云陸奥國舍津蜷川庄半分事公

方恩賞申沙汰之程所充行也守先例可被

致沙汰之狀如件文和三年十一月九日結

城之河守殿中勢大輔花押按中勢大輔吉良俊家

尊卑分脈云斯波家兼本時伊豫守左京大

夫奥州管領延文元六十三卒四十九歲

上杉系圖云刑部大輔憲春弟憲英藏人大

夫陸奥守奥州官領法名常興太宗號國濟

寺

武衛系圖云家兼伊豫守左京大夫出羽陸

奥大將號斯波

大崎系圖云斯波家兼左京大夫伊豫守依

勅命与舍兄高經下向於北國而退治於義

貞故賜出羽陸奥探題下向時光明院御綸

旨并金淵太刀從高氏賜之而退治石塔殿

安定羽奥國祖先領總州大崎故於當國曰
大崎也家兼男直持左京大夫刑部大輔二
男兼賴羽州最上祖延文三年八月三日下
向最上山形
奥州那須令大安寺文書云大寺安藝入道
道悅竹貫參河口部光貞相論石川郡吉村
之事道悅所申頗有其謂云々早任代々可
致領掌狀如件明德五年七月一日左京大

夫判 按左京大夫々々
斯波直持也

上杉系圖云憲英男憲光廳鼻和左馬助奥
州管領法名光山道盛雲龍軒

白河文書云内々承以名取北方内本知行
地事今度於其方被致忠節以者不可有子

次依媒妁依息女嫁伊達氏

卷川親元記云奥州探頭左清門依殿一清

所氏家之河守同州斯波治部大捕殿斯波

之領瀧浦一羽州探頭右京大夫殿氏廿三

家伊与守以上之个所事右田上野介光注

中分也按左此依之右依教兼あり治部大捕ハ其

人なり右京大夫ハ石川文書云探頭与富津河内守边日及弓

矢之右石可然ハ不日可也廻計斗略

字上義事あり

縱能雖有之執軍東と發之弓去也別圖法事

早速令出陣可也彼忠節之由所也作下也

仍執達也件宣正六年五月十九日石川治

部大捕殿尾張守

大崎系圖云教兼子政男兼陸奥守政兼子義男

兼左京大夫依屋裏乱走伊達伊達氏金澤

氏加勢三百餘騎而被送大崎故嗣家上洛

而從公方義尚義之一字并包平之御太刀

并領馬

嵯川親俊記云天文七年六月十五日丁巳

奥州探頭大崎及より律状アリ黄令二支

大窪雅樂允黄令一支大崎及

大崎系圖云義兼男子高兼彦三郎立一年而

早世依無嗣子請於伊達左京大夫植宗末

子小僧丸而為髻冠而號義宣住岩手澤城

翌年八月三日大風起屋室廢壞此時息女

不幸壓死其後義宣出奔葛西於桃生过堂

病死

伊達文書云就奥州探頭職之儀為礼大尊

一本馬一尺在黄令之十支到来目かハ猶

晴光可申ハ為レ手指下孝河ハ也九月廿日

日伊達左京大夫之義輝按左京大夫之植宗ありこれハ其子

小僧丸大崎家とつき一時的に

大崎系圖云高兼男義直左京大夫上洛時

公方發向越前國御對面無之故翌年大寄
惣先達山伏狹澤上野下向之次自公方御
書并鎧并領義直子^男義隆左衛門督秀吉公
發向于關東而北條^家宗族御退治之時遠國
遲參之諸家皆被^レ令去其城天正十八年八
月十九日退賀美郡中新田城移同郡小野
田城同月二十四日經^レ取上路而上洛寓千
本其後依秀吉公命被^レ屬長尾景勝於奥州

會津卒

按足利殿之權とてとて初は奥羽を僻遠
乃地をく控勢の及ぼし物とのあり
と小島家官軍の首將とて奥羽乃二例
を統帥ありとある二國の武士候を指揮と
後山一六三を歴とてとて為る守持院
殿一族石堂義房と法奥の法將とてか
主九回内乃大少事浅沙法とてとて且八奥羽

乃武士と招誘し〜の事未ゆ仕き〜是且を
 軍と備習し〜官軍と討しむこれの内
 不奥州探頭の始なりに後義房の職と
 免て畠山國氏と吉良自家二人の命と
 法奥探頭と〜國氏とありて自
 家に殺され〜は後自家初り國事を
 執りせり自家不職と子國家の傳〜後
 又畠山國氏の男國註と探頭の職と

法家と共に國勢は後〜は
 斯波家兼奥州二州乃探頭は任歩らは下
 向しは二玉の戦敗と司とりけ控ハ其地遠く
 二玉の上り出さはけ畠山家ハ國詮の子
 滿泰の時は一方の探頭とは吉良
 家と法家とをは職とは上杉家と又爰領
 五ア〜をくはわとはくは奥州の地は〜斯波
 一家の管領は不とは〜
薛田系國の吉良法家を治氏
 小傳は改名せりとん也同

系圖は治氏の子治部左輔治部時子源念基氏朝臣 兼の子
奥州より召返し上州のゆゑに末代とありしゆゑ也

直持の時よむと兼頼と出羽探題の定めを
のしむると奥州の成敗を授けりそより二人の子孫
永く吾國の成敗を掌りて他門の族に任じら
らざる事とありぬと云ふより是利家にて是ふ主職
よしと九州探題にいしとあつたさきと大將義隆職
をまひし後ハまゝと是と云ふことありしやふ

羽州探題

最上系圖云斯波家兼二男兼頼修理大夫
出羽大將延文元丙申年八月六日出羽國
最上郡府中山形入部康暦元年六月八日
卒兼頼男直家右京大夫應永十七年正月
六日卒直家男滿直修理大夫應永卅年八
月三日卒滿直男滿家修理大夫嘉吉三年
五月廿八日死滿家男義春右京大夫文明
六年二月廿七日死義春男義秋修理大夫

文明十二年十二月廿六日卒義秋男滿氏
治部大輔明應三年七月十四日卒滿氏男
義淳左衛門佐永正元年九月九日卒義淳
男義定修理大夫永正十七年二月二日卒
義定男義守天正十八年五月十七日死義
守男義光出羽守天正十九年任侍從慶長
十六年三月廿三日任少將同十九年正月
十八日死

按出羽大將を一本に記す所
案使

蜷川親元記云奥州探頭左衛門修後一法
不氏家三河守羽州探頭右京大夫及氏家
伊与守以上右田上野介光
伊与守ハ其子也
奥羽永慶軍記云
白鳥十郎羽陽谷地ノ住
白鳥長久カ嫡子十郎義國ト云シ者イカ
ニモシテ山形ヲ滅シ最上三郡ヲ手ニ入
國中ノ大將ニナラハヤト明暮心ニカケ

ケルカ免角信長將軍ニ見エ媚ヲナシ其
後一揆ヲ起サント擬セラレトモ時シ
モ乱タル世ナレハ左右ナウ通ルヘキ莫
難ケレハ先白鳥隼人ヲ使者トシテ尾州
安土ノ御所ヘソ遣シケル畧中此莫最上義
光ノ臣氏江尾張守ハルカニ聞テ義光ニ
申ケルハ白鳥十郎ヒタスヲ信長公ヘ媚
ヲナスト承ル今ノ世ノ習ヒニテ若ソシ

リ企テ君ヲ討奉ント議スル事モ有ヘシ
是ヨリモ使者ヲ以仰ラレ然ヘウ候ト申
ケレハ義光ケニモトテ志村九郎兵衛ヲ
使者トシテ信長公ヘ遣シケリ九郎兵衛
國ニ乱通路心ニ任セ子ト越後國ヨリ北
國ヲ經テヤウミトシテ到著ス山本彦
三郎ヲ以テ白鷹一居献シ其序ニ申ケル
莫義今度某ヲ差上セ候莫別義ニアラス

是マテハ未シロシメサレ又事モ候ハン
義光先祖按察使足利修理大夫兼頼ヨリ
今義光迄八代出羽ノ國ノ大将ニテ候日
外白鳥十郎使者ヲ以テ己羽州ノ大将夕

此ヲシテ

此ノ事ハ...

此ノ事ハ...

へ奉ルト承ル是極ノタル偽ニテ候此旨
ヨク々々申セトテ某ヲハル々々差上セ
テ候ト申ケレハ信長公キコシメシテ扱
ハ白鳥十郎偽リケルコソ心得子ソノ義
ナラハ義光出羽ノ大将タル莫疑ヒナシ
トテ剩其時四位ノ少将ニソ補セラレケ
ル九郎兵衛ニモ御對面有テ御暇給リケ
レハ急キ本國ニ歸ケリ義光大ニ喜ヒサ

アラハ軍兵ヲモヨホシ谷地ノ城ニ取カ
ケ十郎ヲ討ントソ宣ヒケル
按義光少将也
あるハ慶長十六年

あるは初書の説
誤りなり

又云 山北前田 北奥州北羽州ノ邊へハ國
中ノ事サへ音信不通ノ時ナレハ何事モ
偽ノミ多カリシカ最上會津ナト使者ヲ
上セテ國中ノ探題職ヲ蒙リシナトニア
ラ又虚説唱エケレハ油断スへキニアラ

又云

按羽州探頭之斯波家兼奥州羽二州の探頭

とありし不持樂とありし時ハ人オト武

中國代兼さるるたる一之然りと家急つ子直

持父の職を継ぐ後出羽の管領とハ家急頼

小濱とありし奥羽の結とありし家急の不

職を承るるなりし以後兼頼つ子孫永く室上

郡又居居して四月の改勢とつとありし室上

義光の時いひしとありし職を世ふきしなりし

文明の應の際より天下悉く社とありし何れ乃

地と圖詳れ思ありぬりありしハ奥羽の支探

争ひありし古乃とありし法術とありしとありし

なくしと勢とありし衰微とありしとありし

義光頗英武の才ありしなりしや家急とありし

に世の轉轉なりしとありし探頭の職とありし

也也とありし職とありしとありし

さう、奥州探訪の准としてききとる事也

陸奥出羽管領

謙倉大草紙云應永五年十一月廿日氏満四十二
歳より一山遊去なり若君満兼之後即位下在清
督以補任より謙倉不傳り終つ以年亦一復願を
上杉中務禪助承之應永六年春より陸奥出
羽支國のより是より謙倉殿より満貞満直
二人のり向^稻物村藤川あり以是年同九年奥州

官方の隆堂伊達大膳大夫政宗法名圓教隠謀
と企て藤川度の下知と考さうひしと一昧同心
乃族蜂起しきふる同五月廿一日上杉右半つ侍
入道禪秀が為大物殿向と伊達よりくすり
赤館と云ふり一城とあり合戦して謙倉督と
追返し考く討たきと然もを國の大督きて
馳向し九月廿日伊達打負清兼は
又云禪秀病氣のより披露し引就謀反

を起し新西堂殿の四月書不禪秀副物より廻
文をほろりし京都より此信より持成公并憲基
茂可より追討中形より作事より西法中人より
より法奥より西條河原へ形より芦名盛久白
川結城石川南郭着西法より宇那の考より各
同人より

又云寛永卅一年三月三日京都より照西堂
為法使下向あり是より京都の四月知より下りて

大名数多の御代の本條より西の御代持成
大よりおろりし終ひ寺對京都一切石段私曲自
今以後ハ可抽ニ忠勤由告文より西堂
五月十日止法九月より下向あり都鄙の和
睦あり同お度事法より十一月廿日西堂
奥列の編村及徳倉の御代是ハ今度西和睦
事より西許より思石奥州より御代法至法
とこの由より永安寺より西度同亦日持成水

悦の修りふ永安寺へ出る代の中乃り月費
と進み同廿七日辛く代の濁つ通の以後は
成るをきり何れも南の家の婦の以て實也

喜連川系圖云滿兼弟滿直稻村殿持氏同
時自害滿直弟滿貞篠川殿於報國寺與義
久同自害

喜連川判鑑云持氏永享十年六月十六日
憲實御退治トシテ鎌倉ヲ御立武州高安

寺ニ御陣三浦介時高鎌倉ノ御留守夕リ
因茲憲實京都ニ訴つ京都ヨリ鎌倉退治
トシテ上杉中務少輔持房大將トシテ綸
旨ニ御教書ヲ添て諸勢ヲ差下サル九月
廿八日早川尻ニテ合戰持氏ヲ背く者多
クシテ敗北御陣ヲ相州海老名ノ道場ニ
移シ玉つ十月二日鎌倉ノ警固三浦時高
心替シテ三浦ニ退去同月十七日鎌倉兵

火十一月朔日三浦時高二階堂ノ一族上
杉持朝大藏谷ニ亂入ス近習輩出合テ合
戰其間ニ義久稻村滿貞報國寺ニ入テ御
自害同月五日海老名ヘ義久御生害ノ由
聞ユ持氏急キ鎌倉ニ歸リ入り玉ヒ長尾
芳傳カ陣中ヘ憲實ト和睦ノ義ヲ仰下サ
ル芳傳謀ニ領掌ニ奉テ金澤ノ稱名寺ヘ
供奉同十一日永安寺ニ移ニ奉リ御剃髮

ナリ十一年二月十日於永安寺御自害迄
臣數十人自害

按足利殿の時奥羽の成敗ハ新波友家の世職
ろくろ沙汰するふかき別ニ管領を至不承す
謂まかまに似たりやいふ明徳中麻花院殿
の定免もく奥羽の二國を以て奥東八州と
鎌倉公方家より管領ありて申合せし
つて應永六年上杉禪助のけしひりて當時

ふ事ありき振夷の事と云ふは我國の東北

南に大海の中央あり中 根本なる酋長あり

と武家を濫吹と謗護せんともふ安友と

云考我振夷復願とと子孫に五郎三郎季久

又大五郎季長と云は浪舟父也嫡庶未編の事

何れも合戦数年不及るあるを聞かざる事

理水と裁決とを彼より留るの士卒数千夷賊

と信集し不浪月未那西浪折角關城と據る

お年ふあの城冷胆より〜 浩河を隔く雌雄

臣不決〜 因茲武將大軍をき〜 征伐を

〜 凶徒活盡し〜 討に字は忠の衆人紀法

支黨也其輩多以合戦墮墮淋涼者の以て及

負任逃討の首也〜 本席をや累んと衆人怖

畏と〜 季長と徳人忽に城墮と破却

〜 甲と姫も弓乃活と〜 官軍の陣

不活と三軍万歳と稱して別室東の垣を

地藏靈驗記云往日鎌倉ニ安藤五郎トテ
武藝ニ名ヲ得タル人アリケリ公命ニヨ
リテ夷島ニ發向シ容易^易夷敵ヲ亡其貢ヲ
ソナヘサセケレハ日本ノ將軍トソ申ケ
ルサレハ夷トモ年毎ニ貢ヲソ奉リヌ
保曆間記云元亨二年ノ春奥州ニ安藤五
郎三郎同又太郎ト云者アリ彼等カ先祖
安藤五郎ト云者東夷ノ堅メニ義時カ代

官トシテ津輕ニ置タリケルカ末也此兩
人相論スル莫アリ高資數ニ賄賂ヲ兩方
ヨリ取りテ兩方ヘ下知ヲナス彼等カ方
人ノ夷等合戦ヲス是ニ依テ關東ヨリ打
手ヲ度々下ス多ク人軍勢亡ヒケレ^{トモ}年
ヲ重テ莫行ス

按高資ハ山陰家ノ門
後順長侍ナリ厨アリ

異本伯耆卷云奥州津輕ノ住人安東又太
郎季長同郎從季兼ト同又三郎ト云者所

領ノ事ヲ論スル子細アリ兩方訴ヘケル
ニ高資賄賂ニフケリ理アルヲ非トシテ
悪サマニ下知シケレハ兩方下知ヲ背及
合戦コトアリ此安東ト云ハ義時カ代ニ
夷島ノ押トシテ安藤カニ男ヲ津輕ニ置
ケル彼等カ末葉也

北條記云元亨二年出羽蝦夷蜂起度ニ及
合戦自去元應二年蜂起云々正中二年六

月六日依蝦夷蜂起事被改安藤又太郎以
五郎三郎補代官職訖嘉曆元年三月廿九
日工藤右衛門尉祐貞為蝦夷征討使進發
七月廿六日祐貞虜季長歸參二年六月宇
都宮五郎高貞貞小田尾張權守高知為蝦夷
追討使下向三年十月奥州合戦事以和談
之儀高貞高知等歸參

按謙倉在石原ノ事武家代奥州ノ事

御所 徳守府將軍及秋田城介なるもの奥
羽乃を界とせりて 蝦夷移居の職なり
右左將家を控とせりて 後々徳守府を
官職に遷せりて 夷狄に叛乱不備ゆ
はるるをせりて 山陰我時我家の執
持たりて 此の安房長と津輕輕の夷地を居
らるるに 奥羽及渡島に 蝦夷を誘へ夷人
目と置けりて 此の孫を傳へて 蝦夷法

在 徳の代友をうきあはれをせりて 小條高時の
執持の時より 奥羽の蝦夷叛乱の事
ありて 小法長安房孝長とを制せりて 此の
徳の代友をうきあはれをせりて 職にありて 孝長
一門孝久を以て 津輕の事後とせりて 其の至
正一のらに 教をよるる果より 安房一家の
闘争より 及びしうを 鎌倉より 征討使をきり
て 一きひに 平定せりて かくかりきりて かくほりて かな

く小條乃族亡ひとて一月以職永く絶

なり

武家名目抄第四十八冊

